

9. 心理社会的発達論

(1) 心理社会的発達論

エリクソンの発達理論は、人間が生まれてから死ぬまでの時間を現在から遡って、社会的生活を営む存在として心理社会的にどのように発達するのかを研究したものです。

彼の理論の特徴の1つは、＜漸成原理＞です。人間は出生してから社会的な存在になるまで、予定された各発達段階に沿って成長していくと考えます。その発達段階で重要な部分機能を自覚するようになります。しかし、それが自覚されなかったりすると＜危機＞になると考えます。

もう1つの特徴は、＜同一化＞です。これは各発達段階の危機を克服すると獲得される、＜自分は自分である＞と自他ともに認識できるような状態です。

また、発達段階を8つに分け下図のような「漸成説図表」を作成しました。各発達段階で＜同一化＞と＜危機＞を対で表しています。

| | | | | | | | | |
|------|------------------|-------------------|------------------|------------------|------------------------|-----------------|------------------|-----------------|
| 乳児期 | 信頼感 VS 不信感 | | | | | | | |
| 幼児前期 | | 自律性 VS 恥・疑惑 | | | | | | |
| 同後期 | | | 自発性 VS 罪悪感 | | | | | |
| 児童期 | | | | 勤勉性 VS 劣等感 | | | | |
| 青年期 | | | | | 同一性 VS 同一性 拡散 | | | |
| 成人期 | | | | | | 親密性 VS 孤立 | | |
| 壮年期 | | | | | | | 世代性 VS 停滞性 | |
| 老年期 | | | | | | | | 統合性 VS 絶望 |

(2) 基本的信頼vs基本的不信

誕生から1才半頃までの、子どもが母親との一体感・相互信頼を体験する時期です。

この時期の危機は〈基本的信頼〉と〈基本的不信〉です。〈基本的信頼〉とは、自分のすべてをあるがままに受け入れてくれる他人がいるという安心感と、自分は他人に受け入れられる価値のある人間であるという自分自身に対する信頼感です。それが得られないと〈基本的不信〉に陥り他人や自分を信用できなくなったりします。

(3) 自律性vs恥と疑惑

1才半頃から4才頃までの、子どもの自立が始まる時期です。躰が始まるので分離不安を感じるようにもなります。

この時期の危機は〈自律性〉と〈恥と疑惑〉です。〈自律性〉は、自分をコントロールしようとすることです。何事に対しても積極的に関わっていかこうとする意欲の源が生まれます。しかし、自己コントロールに失敗したり親の意志によって過剰にコントロールされたりすると、未熟で愚かな自分がさらしものになっているのではないかとこの〈恥〉の意識が生じます。

(4) 自発性vs罪悪感

4才頃から6才頃までの、自発的に行動できるようになると同時に、親や仲間に合わせてような自制心が発達してくる時期です。

この時期の危機は〈自発性〉と〈罪悪感〉です。〈自発性〉は、失敗を恐れず欲しいと思うものに対して積極的に働きかけることです。そして、自分が将来どのような役割の人間になろうとしているのかを考え始めます。しかし、高じると親の期待に反するのではないかとこの意識が過剰になり〈罪悪感〉が生じます。

(5) 勤勉性vs劣等感

6才頃から12才頃までの、小学生の時期です。

この時期の危機は〈勤勉性〉と〈劣等感〉です。〈勤勉性〉は、社会について関心が強くなり自分なりに参加しようと試み始め、ものを生産するという方法によって認められることを学ぶようになることです。自尊意識を高まり社会へ出ていく基礎ができます。しかし、生産しても周りの人から認めてもらえなかったりすると、自分は何をやっても駄目だという〈劣等感〉にさいなまれることとなります。逆に、自分のような優秀な人間が存在

するためには劣った人間がいなければならないという歪んだ優越感を持つこともあります。ようになります。

(6) 同一性vs同一性拡散

13才頃の中学時代から22才頃の大学時代までであったが、最近の状況から30才頃までの、子どもから大人になる青年期です。本当の自分とは何か、自分は何をやりたいのか、自分は何になりたいのかがテーマになってきます。

この時期の危機は＜同一性＞と＜同一性拡散＞です。＜同一性＞は、自分自身にとっても他者にとっても自分は自分であるという確固たる自信です。しかし、ただでさえ不安定な状態である上にさらに困難な状況が生じると、自分で自分がわからなくなり様々な形で逃避を企てる＜同一性の拡散＞が生じます。

(7) 親密性vs孤立

年齢によって規定できないが、就職して恋愛をして結婚をするまでの成人期の時期です。

この時期の危機は＜親密性＞と＜孤立＞です。＜親密性＞は、自分自身にある程度の自信があり自分の関わる事柄に親密さを感じることです。親密性によって、就職・恋愛・結婚というこの頃に起こる人生のイベントにもうまく対応でき、人生がより充実したものになります。しかし、自己の同一性に確信がもてないと、人間関係の親密さから尻込みし表面的で形式的な人間関係しか結べなくなり＜孤立＞します。

(8) 世代性vs停滞

結婚して子どもを生き育てる、親としての壮年期の時期です。

この時期の危機は＜世代性＞と＜停滞＞です。＜世代性＞は、自分にとって最も親密な存在を自分たち自身で作り出していきたいという気持ちです。自分の子どもだけでなく、後輩や若手の教育や文化的遺産の継承などの意味も含んでいます。自分を犠牲にして成長を援助しなければならない場合も多いが、それを補って余りあるものが得られます。しかし失敗すると、歪んだ親密さや対人関係における退行現象となって現れ＜停滞＞します。また、自分自身以上に大切な存在がないために、自分のことを中心に考えるようになる傾向もあります。

(9) 統合性vs絶望

子育てが終わったり退職したり，公私に渡って役割の方向の転換を迫られる老年期の時期です。また，自分の死を受け入れる準備をする時期でもあります。

この時期の危機は＜統合性＞と＜絶望＞です。＜統合性＞は，人生の完成に当たって今まで獲得してきた同一性を振り返り，自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受け入れることです。しかし，最後まで自分のライフ・サイクルを人生の究極として受け入れられないと，別の人生を始めようとしたりするが，時間的にも不可能であります。不完全感が強まり＜絶望＞に陥ります。

E・H・エリクソン『自我同一性』誠信書房1982

小口忠彦『人間の発達課程』明治図書1983